

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『狐物語』研究の現況
Author(s)	原野, 昇
Citation	フランス文学, 20 : 24 - 30
Issue Date	1995-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041004">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041004</a>
Right	
Relation	



# 『狐物語』研究の現況

原野 昇

## 1. 国際動物叙事詩学会と機関誌 *Reinardus*

約20年前の1975年に、グラスゴー大学の Kenneth VARTY教授の主唱のもとに、同大学で開催された第一回国際動物叙事詩学会 1<sup>er</sup> Colloque international de l'épopée animale, fable et fabliau 以来、二年に一回定期的に開催されている同学会は、<sup>1)</sup>『狐物語』関係の研究成果発表の重要な場となっている。同学会で発表された論文は、第一回大会から第五回大会までは、その都度の会議録 *Actes*として刊行されており、<sup>2)</sup>第七回大会以降は、主要な発表が雑誌*Reinardus*(年刊)の2号に分けて掲載されている。同雑誌は国際『狐物語』研究学会 Société internationale renardienne の機関誌として1988年に創刊されたものである。<sup>3)</sup>この機関誌の創刊によって、それまで大会主催者が大会の準備・運営という膨大な仕事の後に控えていた、*Actes*の編集・刊行というこれまた膨大な資金とエネルギーの必要な任務から解放されたのである。これらの*Actes*や*Reinardus*に、最近20年間に発表された『狐物語』関係の多くの論文が掲載されている。

## 2. Monographie

『狐物語』のみ、または『狐物語』とその他いくつかのテーマに的を絞った論文集も刊行されている。

- (1) Danielle BUSCHINGIER & A. CREPIN, *Comique, satire et parodie dans la tradition renardienne et les fabliaux*, Göppingen, 1983.
- (2) K. VARTY, *A la recherche du Roman de Renart*, 2 vol. New Alyth(Lochee Publications), 1988, 1991.
- (3) Jean DUFURNET, *Le goupil et le paysan*, Paris(Champion), 1990.
- (4) J. DUFURNET, *Du Roman de Renart à Rutebeuf*, Caen(Paradigme), 1993.

(1)は1983年1月15-16日にアミアン大学で開催された同名の Colloque の *Actes*であり、13編の収録論文のうち6編が『狐物語』関係 (*Reinhart Fuchs*関係も含む)であり、残り7編は *fabliau*関係である。

(2)は VARTY氏の還暦記念論文集であるが、19編の論文のうち9編は VARTY氏自身の論

文である。全体は次の4章に分けられている。I Composition et structures, II Langage et art littéraire, III Justice, IV Iconographie: avant et après l'oeuvre de Perrot.

(3) は第IX枝篇（農夫 Lietart）のみを取り上げ、写本、構成、内容、登場人物などさまざまな角度から、9名の執筆者各1編ずつの論文を集めたものである。

(4) は DUFURNET氏の既発表の論文16編を集めたものであるが、そのうち8編が『狐物語』関係である。

その他 *Revue des langues romanes*, t.XC (1986), No.1 は J. DUFURNET氏編集による *Avatars du Roman de Renart* という特集を組んでおり、5編の『狐物語』およびその関連の論文が収録されている。

### 3. Bibliographie および Index

VARTY氏は1978年に *An Etat présent of the Roman de Renart Studies* という論文を発表したが、その後も『狐物語』研究に関するありとあらゆる文献を収集し、近くそれを一書にまとめて刊行される予定である。しかしそれは未刊なので、現時点での詳細な Bibliographie と言えば何ととっても Jean SCHEIDEGGER, *Le Roman de Renart ou le texte de la dérision*, Genève, 1989 の巻末のそれである。これは30ページ近くにもわたるもので、現在までに発表された『狐物語』およびその周辺に関する著書・論文が網羅されており、非常に便利かつ有益なものである。

M. de COMBAREIU & J. SUBRENAT, *Le Roman de Renart, index des thèmes et des personnages*, Aix-en-Provence(C.U.E.R.M.A.), 1987 はその書名からも分かるように、『狐物語』の各校訂本、各枝篇の対照、テーマ、モチーフ、登場人物の詳細な Indexであり、『狐物語』を研究する上で非常に便利な「作業道具」instrument de travail となっている。

### 4. 写本研究およびテキストの校訂

福本・原野・鈴木によるγのテキスト校訂本の刊行<sup>4)</sup>は『狐物語』研究史上画期的なことであった。これにより、α (MARTIN版)<sup>5)</sup>、β (ROQUES版)<sup>6)</sup>、γのテキストを並べて比較することができるようになったのである。現在では『狐物語』のテキスト研究においては、必ずこの三種類のテキストが考慮されている。ただβのテキストに関しては、ROQUESの死後中断したままになっているB写本最後の枝篇、第XI枝篇のみが未校訂であり、唯一の欠陥となっている。

Anthony LODGE氏とK. VARTY氏とが共同で、γ群のM写本を底本として第II-Va枝

篇の校訂本を刊行している。<sup>7)</sup>

写本に関しては Ettina NIEBOER 女史、福本直之氏などが精力的に発表しており<sup>8)</sup>、埋もれていた写本の発見報告なども行われている。<sup>9)</sup>

写本を研究しテキストを確定する作業は、必然的にテキストの生成過程 *genèse* の研究につながる。テキストの生成過程を明らかにすることは、近代の作品に関しても重要な研究分野となっているが、中世作品に関してのこの問題の重要性は格別である。作者自身によるテキストの変更の結果生じたテキストの浮動性 *mouvance* のみならず、筆写の過程に見られる写字生の自由大胆な変更が加わるからである。この問題は次の項で見る、系統別テキストの研究につながる。

## 5. 系統別テキストの研究

『狐物語』独特の研究領域として、 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$  各系統のテキストについて、その特徴、異同等を論じる分野がある。多少ともこの点に言及している論文は非常に多いが、例えば Roger BELLON, *L'Art du remaniement. Les aventures de Primaut le loup dans les mss. A et C*<sup>10)</sup>, Id., *De la chaîne au cycle? La réorganisation de la matière renardienne dans les manuscrits C et M*<sup>11)</sup> などは、この問題を真正面から扱ったものである。

## 6. Narratologie

Elina SUOMELA-HARMA, *Les structures narratives dans le Roman de Renart*, Helsinki, 1981は Vladimir PROPP の *Morphologie du conte*, 1928 (原文はロシア語、邦訳『昔話の形態学』〔白馬書房〕1981) の分析方法を『狐物語』に応用したものである。

J. DUFOURNET氏は、中期・後期の枝篇の作者はすでに存在していた『狐物語』の初期枝篇に親しんでおり、これらの枝篇を構成するエピソードやテーマやモチーフを、そのまま利用したり、変形したり、新しく追加したりしながら、新たな枝篇を作っていたとする立場から、「書き直し」 *réécriture* という術語を鍵語として、一連の論文を発表している。<sup>12)</sup> これらの論文の背景には、同じ物語図式の反復という考え方、および Julia CRISTEVAのいうテキスト間相互連関性(間テキスト性) *intertextualité* が意識されていると思われる。『狐物語』全体を一つのテキストと見れば、テキスト内相互連関性 *intratextualité* ということができるかも知れない。

## 7. テーマ研究

Roger BELLON氏はリヨン第Ⅱ大学に提出した学位論文 *La Ruse dans le Roman de Renart*, 1982,(dactylo)以来, *L'Eau dans le Roman de Renart*,<sup>13)</sup> *La Justice dans le Roman de Renart*<sup>14)</sup> といったテーマ研究の論文を発表している。前者では「水」をさらに、湧き水(泉), 流水(小川), 生活用水(井戸, 養魚池), 淀んだ水(堀, 沼)などに分類して論じている。

その他「空腹」 *faim* や「逆さまの世界」 *le monde à l'envers* のテーマについての論文などがある。<sup>15)</sup>

## 8. 比較研究

この分野は『狐物語』の場合, 源泉 *sources*研究と密接な関係がある。 *Ecbasis captivi* 『囚人の脱出』や *Ysengrimus* 『イセングリムス』など *Les Avant-textes* との比較研究である。<sup>16)</sup>

また低地オランダ語版など *Les Adaptations étrangères* との比較研究がある。

## 9. その他

3の *Bibliographie*のところで紹介した J. SCHEIDEGGER 氏の *Le Roman de Renart ou le texte de la dérision* はジュネーヴ大学提出の学位論文であるが, 1~8で見てきたような『狐物語』研究の諸分野を視野に入れた広汎なものであり, これまでの『狐物語』研究の集大成といった観がある。すなわち写本の問題, 起源の問題, テクスト伝承の問題, *réécriture*の問題など, 漏れなく考察されている。J. DUFOURNET氏はこの本を評して次のように述べている。“Le travail passionnant et passionné de Jean Scheidegger témoigne d'une connaissance intime du *Roman de Renart*, d'une constante connivence, fruit d'une attention intelligente et aiguë à sa réalité matérielle, littérale. De là de très bonnes pages sur les collections, et J. S. a raison de parler de 《la réécriture et du réarrangement d'une collection de textes mouvants》, de là d'utiles remarques sur les variantes, les doubles sens et les jeux sur les mots (encore qu'il faille faire un tri, tous ne semblant pas à retenir), sur les graphies.”

<sup>17)</sup>

Jean BATANY, *Scène et coulisse du 《Roman de Renart》*, Paris(SEDES), 1989 は小本ながら, 最近の研究成果を取り入れた, 恰好の『狐物語』概説書となっている。Hatier社の *Connaissance des Lettres* シリーズ中の Robert BOSSUAT, *Le Roman de Renard*, 1957 を補完するものと言ってもよからう。BATANY氏は最近の『狐物語』研究

の主要分野（傾向）orientations principales として次の5人の業績をあげている。上で概観したことと補い合うところがあるろう。

(a) Elina SUOMELA-HARMA 女史の、PROPP や GREIMASらの昔話理論を応用した、ナラトロジー的研究。

(b) Kenneth VARTY 氏の organisation des 《anthologies》の研究。

(c) Jean DUFURNET氏の récurrence des mêmes schémas narratifs の研究。

(d) François Amy de La BRETEQUE 氏の『狐物語』と他作品との比較研究。

(e) Roger BELLON氏のγ版校訂本に基づくγテキストの研究。<sup>18)</sup>

## 注

1) 第2回大会 1977年 アムステルダム（オランダ）

第3回大会 1979年 ミュンスター（ドイツ）

第4回大会 1981年 エヴルー（フランス）

第5回大会 1983年 トリノ（イタリア）

第6回大会 1985年 スパ（ベルギー）

第7回大会 1987年 ダラム（イギリス）

第8回大会 1989年 ローザンヌ（スイス）

第9回大会 1991年 フローニンヘン（オランダ）

第10回大会 1993年 オルレアン（フランス）

第11回大会 1995年 デュッセルドルフ（ドイツ）〔予定〕

第12回大会は1997年にイタリアで開催される予定であるが、その前年の1996年7月に日本で特別大会が開催されることになっている。1995年10月には、日本学術振興会の（短期）招聘外国人研究員として、ポワチエ大学中世文明研究所長で、国際『狐物語』研究学会の現会長である Gabriel BIANCIOTTO 教授が来日され、東京、名古屋、広島での講演のほか、福島県郡山市の奥羽大学における日本フランス語フランス文学会1995年度秋季大会において特別講演をされる予定であるが、同氏の来日は1996年の東京大会の下準備を兼ねている。

なお『広島大学フランス文学研究』1号（1982）、pp.48-50、同6号（1987）、pp. 127-128、『学術月報』Vol.39, No.1（1986）、p. 60に、それぞれ第4回大会、第7回大会、第6回大会の報告記事が掲載されている。

2) 第1回大会：K. VARTY (éd.), *The Proceedings of the International Beast Epic*,

*Fable and Fabliau Colloquium*, Glasgow, 1976.

第2回大会：*Marche romane*, vol.28 (1978)

第3回大会：J. GOOSSENS & T. SODMANN (éd.), *Proceedings of th Third International Beast Epic, Fable and Fabliau Colloquium*, Köln/Wien, 1981.

第4回大会：G. BIANCIOTTO & M. SALVAT (éd.), *Epopée animale, Fable, Fabliau, Actes du 4e Colloque de la Société Internationale Renardienne*, Paris (PUF), 1984.

第5回大会：A. VITALE-BROVARONE & G. MOMBELLO (éd.), *Atti del V Colloquio della International Beast Epic, Fable and Fabliau Society*, Alessandria, 1987.

第6回大会（1985年）の発表はActesとして刊行される予定で原稿が集められていたが、それを関係者が紛失するという前代未聞の事故が起き、8年後の1993年に *Reinardus* 特集号としてようやくその一部が刊行された。

第6回大会：*Reinardus*, Numéro spécial, 1993.

第7回大会：*Reinardus*, No.1, 1988 ; *Reinardus*, No.2, 1989.

第8回大会：*Reinardus*, No.3, 1990 ; *Reinardus*, No.4, 1991.

第9回大会：*Reinardus*, No.5, 1992 ; *Reinardus*, No.6, 1993.

第10回大会：*Reinardus*, No.7, 1994 ; *Reinardus*, No.8, 1995〔予定〕

3) 『広島大学フランス文学研究』8号（1989），pp.82-86参照。

4) Naoyuki FUKUMOTO, Noboru HARANO et Satoru SUZUKI (éd.), *Le Roman de Renart* édité d'après les manuscrits C et M, t.I 1983, t.II 1985, Tokyo (France-Tosho).

5) Ernest MARTIN (éd.), *Le Roman de Renart*, Strasbourg, t.I 1882, t.II 1885, t.III 1887.

6) Mario ROQUES (éd.), *Le Roman de Renart*, Paris (Champion), 1948-.

7) Anthony LODGE & Kenneth VARTY (ed.), *The Earliest Branches of the Roman de Renart*, New Alyth, 1989.

8) Ettina NIEBOER, A propos du ms. F du *Roman de Renart*, in *Reinardus*, Numéro spécial (1993), pp.95-130.

Id., Un regard nouveau sur le manuscrit I du *Roman de Renart* (B.N., f.fr. 12584), in K. VARTY, *A la Recherche du Roman de Renart*, t.II, New Alyth, 1991, pp.445-469 など。

N. FUKUMOTO, *Le Roman de Renart*. Br.Ib, in *Bulletin de la Faculté des Lettres de*

*l'Université Soka*, V, 1(1976)ほか多数。

- 9) N. FUKUMOTO, Fragment de *Renart* : Bruxelles, Bibl. Royale, II 139 (= ms. r), in *Pluteus*, II(1984), pp.71-77.  
Luciano ROSSI & Stefano ASPERTI, Il *Renart* di Siena. Nuovi frammenti duecenteschi, in M. R. YUNG & G. TAVANI (éd.), *Studi francesi e provenzali* 84/85, Rome, pp.37-64. (= ms. s)  
Naoyuki FUKUMOTO, Noboru HARANO et Satoru SUZUKI, Sur un nouveau fragment du *Roman de Renart*, in *Romania*, t.107(1986), pp.397-400. (= ms. t)  
原野昇「『狐物語』の新発見断片写本について」, 『フランス語フランス文学研究』51号(1987), pp.1-5. (= ms. t)
- 10) in *Reinardus*, II(1989), pp.18-31.
- 11) in *Revue des langues romanes*, XC(1986), pp.27-44.
- 12) J. DUFOURNET, La Réécriture dans la *Confession de Renart* (branche VII du *Roman de Renart*), Jeux et enjeux, in K. VARTY, *A la recherche du Roman de Renart*, New Alyth, vol. 1, 1988, pp.95-106 など。
- 13) in *Senefiance*, XV(1985), pp.61-78.
- 14) *Ibid.*, XVI(1986), pp.79-96.
- 15) Michelle AUGIER, Le Thème de la faim dans les premières branches du *Roman de Renart*, in *Mélanges Jeanne Lods*, Paris, 1978, pp.40-48.  
Micheline de COMBARIEU, Le Thème du monde à l'envers dans la branche XVII du *Roman de Renart*, in *Mélanges Jean Larmat*, Paris, 1982, pp.415-425 など。
- 16) François Amy de La BRETEQUE, Un Conte à personnages animaux du Moyen Age : le partage des proies (études des formes et des thèmes), in *Revue des langues romanes*, XXXI(1975), pp.484-507 など。
- 17) in *Le Moyen Age*, t.96(1990), p.545
- 18) Jean BATANY, *Scène et coulisse du «Roman de Renart»*, Paris, 1989, pp.14-16.